
素敵な恋は夜明けと共に！

Coffee-milk Crazy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素敵な恋は夜明けと共に！

【Nコード】

N2627Y

【作者名】

Coffee—milk Crazy

【あらすじ】

日本のある地方。片田舎に住まう女子高生が森の中で殺された。そして時と空間と次元を遷して、1998年7月23日深夜 アメリカ合衆国 某州 ラクーンシティ郊外の森林地帯で、ある歴史的な大事件が発覚する。対処に向かった特殊部隊の中に、若干18歳の女性隊員がいた。奇しくもこの事件が彼女の初任務であった。

? Ending (前書き)

はじめまして！

一応転生物のような始め方をしていますが、先の展開にはまったく関与してきません。

してるのかもしれないけどわからないようになってます、僕もわかりません。

ただバイオハザードの世界をパラレルワールドという位置付けにするためだけのものです。

転生物嫌いの方も大丈夫なのではないかと勝手に考えています。

基本的には原作をなぞり、物語も真面目に進行させますが、死ぬ人が死ななかつたりします。

そういうのが許せない方はバック願います。

では、温かい目で見守っていただきたいと思います。

? Ending

日本のある地方。見渡す限り青々とした田園が広がる村、いや（国土地理院の調べによる限り）町なのだが……。数百年前にタイムスリップしてしまったかと思われるほどに、まさしく日本の夏風景を映しているその中心に、茶髪に短いスカートとまたしてもありふれた設定、田舎の都会に憧れる女子高生が一人歩いていた。

「はああ……、まったく、疲れた」

遠くに見える山が斜陽にさらされて、彼女の足元にまでその影を伸ばしていた。てらてらと、一向に秋の気配を感じさせない風が長い髪と稲穂をさらっていく。これで何度目になるかわからないが、彼女は乱れた髪を丁寧に耳に挟んだ。

一見して幻想的に思える景色も彼女にとってはただの日常でしかない。都会人が人ごみ、雑踏、満員電車にうんざりするのと同じことだ。また彼女はむしろその人ごみ、訂正すると、人との触れ合いに淡い幻想を抱いているのである。

この狭く退屈な変わらない世界を飛び出して、自分自身の力と愛とによってどうしても生きていけるところへ行きたい、と。彼女は常々願っていた。

「はああ……」

しかし、思わず、ため息がもれる。ため息一つひとつが本当に幸せ

をさらっていくのだとしたら、彼女にはこの先幸せは訪れることはないだろう。

今日は親友の家に遊びに行った。彼女としては、紅茶を飲みながらファッション雑誌を傍らに二人でお洒落なトークをしたかったのだが、わかってはいたけど向こうといったら生粋のゲーマーで、一日中『バイオハザード』にかじりつきだった。しかも要らぬ解説付きで。なんでも『オペレーションラクーンシティ』で再燃したとか。しかし少なくとも彼女の知る範囲では、その作品はかつてのありしバイオハザードの面影を完全に失ったとしか言いようのないもので、よっぽどコアなファンでもない限りそれをきっかけに初代からやり直そうとは思わないだろう。

ところが彼女の親友はそのコアなファンだった。(しかもウエスカ―ぞっこんラヴ)。覚めやらぬ熱気が渦巻く中、のこのこ現れた彼女はまさに巻き添えを喰った形で、隣りに座ってテレビ画面を見させられたのである。

こつてりと絞られて、帰宅途中の現在に戻る。

日は完全に暮れた。新しく朝を迎えた世界から僅かに零れる陽光が空をくすめている様子をずっと眺めていたが、林に入ったのでそれも中断せざるを得なくなった。しばらく街灯もまばらな暗い道を進む。

「ここはいつも肌寒いなあ……。……。きやつ！」

突然言い知れぬ不快感が彼女を襲った。全身を舐め回されるような、悪寒とも言えるそれは、明らかに藪の奥深くから発せられているようだ。

肘を摩り、膝は奮えているけれど、彼女にはその発生源を調べなければならぬような一種の使命感にも似た興奮を感じていた。

躊躇う。そして意を決して、スカートの裾を気にしつつも、藪の中に飛び込んだ。

枝々が大袈裟な音をたてて折れていく。その甲高い音がいよいよ以って彼女の息を荒げていくが、彼女は止まらない。

ちょうど大きな銀杏の木を中心に、それ以外は何故かミステリーサークルのように何もない空間に出くわした。

そして、そこで彼女は事を見届ける神父様を演じたのである。

「ひひひ……、ようこそ」

絵に描いたような変質者だった。

ナイフに付着した血をぺろりと美味しそうに舐めて、彼女にゆっくりと近づいてくる。その背後で哀れな子羊がぐったりと倒れた。

「……………」

口をぱくぱくさせてみるが、出てくるのは空虚な吐息だけ。もはや彼女に弁明の余地はなく、この円形に拓かれた処刑場から逃れるこ

とはできないのだ。

「おや？ よく見てみれば、女の子じゃないか。ひひひ……、やっ
たぜ！ ショータイムの前の余興ができるなあ！」

彼女の薄白い腕に汗ばんだ男の手が爪痕を残す。薄皮を破って、血
が滲み出た。

「最後に言つとくことはあるかあ？」

最期の言葉。そして、するりと抜け出た言葉は奇妙な余韻だけを残
して霧散した。

「ドーナツが食べたい」

あるいはこれは彼女が望んでいたことなのかもしれない。

積み重ねた業はそれが何であれ、必ず巡りめぐって自分のためにな
るものである。

例えばそれは、彼女の願いや彼女のため息のように。

? E n d i n g (後書き)

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

0 E n d i n g (前書き)

ちなみに小説タイトルは0のビリレベルにあてられました

O E n d i n g

ビリー・コーエンは気難しい顔立ちの男で、私と出会ってから一度も笑わないどころか頬の筋肉をぴくりともさせることはなかった。決して無口なわけではなく、気の利いたジョークも時に口にするけれど、状況のせいもあるのだろうか、やはりその表情には陰りが見てとれた。

それでも朝日に照らされた今の彼の横顔がどこか晴れやかに見えるのは、私の気持ちによる錯覚だろうか。

「あれが……、隊長の言っていた洋館……」

一夜の悪夢を振り払うように彼は大きな伸びをして、私の指先も言葉も無視。そのまま寝そべって目を閉じてしまった。

所属が海軍なだけあって、肌が若干焼けていて、背が高く、体格は優に私より二回りは大きい。ぴちぴちのタンクトップを着ているので、浮き出る胸筋とむき出しの腕の迫力とはや壮観、女性に頼もしさを感じさせるには充分だ。

かくいう私もラクーン市警に配属される前の研修で破格の肉体改造をさせられた身なのだが、どこをどう鍛えればアレになるのかまったく見当もつかなかった。これはひとえに性別の差というやつだろうか。

ただでさえ威圧的な腕をしているのに、右腕はその上から漆を塗って固めたような禍々がしいデザインの入れ墨がある。髪型はやっぱ

りオールバック。

もうなにがなんだか……。恐怖の押し売りって感じ。

こんな恰好では、さっきまで左手に手錠をぶら下げていたのも必然な気がしてくる。

例え中身が聖人でもナリがそんなんじゃ、やってないものもやったように仕立てあげられて当然よ。

……。

彼がうとうとしているのを見ると、愛おしくなって、このまま抱きついて何度も何度もキスしたくなる衝動に襲われた。

悪夢の中で、彼は幾度となく私を救ってくれた。この切ない感情は信頼や感謝から来るものであって、決して恋などではない。そう思いたい。なぜかはわからないけれど、好きになったらダメな気がする。私にとっても、ビリーにとっても。

そう頭で考えても、なかなかそのどうしようもない感情を振り払うことができなかった。

それでしょうがなく、ビリーには悪いけど、想い出をもらうことにした。

「……おい」

彼が首からかけていたドックタグをすばやく奪い取って、自分の首にまわす。後ろで何か文句を言っているようだけど気にしない気にしない。

「もう行くね」

さらりと何事もなかったように言ってやると、さすがの彼も呆氣にとられていた。でも何も言わないからそのまま流していいんだろう。

「報告書には、ビリー・コーエンは死んだって書いておくわ」

「ついに俺もあの化け物どもの仲間入りってわけだ」

少しおどけて彼は言った。

「笑えないわよ。とにかくこうなった以上、あなたが犯罪者であれなかれ、ラクーンシティを離れた方がいい。いつか、このこと同じになるはずだから……」

「へえ、まるで見てきたように言うんだな。どうして悲観的に考えるんだ」

「わからない。そんな気がするの……。まあ、S・T・A・R・Sよりよっぽど強いあなたに心配なんか無用ね」

予想以上に重苦しい雰囲気になってしまったので、一転して笑いかけてみた。

別れのときくらい、爽やかにしたいもの。

「そいつはどうも。おまえもこれからすぐに仕事だろ。寝てないからって、仲間とゾンビ、間違えるんじゃないぞ」

あはは、と少年のように明るく笑った。

あれ？　ビリーって……。

「レベッカ、こいつも持っていけ」

呆けているうちに放り投げられたので、危うく取りこぼしそうになった。手のうちには昨夜の立役者、S & a m p; W社製マグナムリボルバー・アンブレラカスタムがあった。危ないとか、投げるなとか、それじゃビリーの手持ちがとか、いくらでも言うことはあったけど、黙っておくことにしよう。

今は彼の笑顔を脳裏に焼き付けることに専念する。
きつとそれはビリーにしたって同じはずだ。

しばらく見つめ合って、それから握手して、お互い向き直って歩き出せば、それでいい！

0 E n d i n g (後書き)

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

The Nightmare comes again. . . (前書き)

／悪夢ふたたび

タイトルはゲーム本編の会話などを参考にして考えていきます
和訳は適当です

The Nightmare comes again...

見上げると、太陽はすでに高く昇り、暖かな日差しを地上に降り注いでいるのが木漏れ日に見て取れた。青々とした葉の香りが漂って、いい森林浴になるなあとは思いうけれど、足取りは決して軽やかではなかった。

一人になって、周囲の警戒はずいぶん大変になった。ビリーから受け取ったマグナムではなく、右手に自前のベレッタを腰に構えて、小まめに辺りを見回しながら、音をたてないように早足で進む。

明るくなったとはいえ、アークレイの深い山林は相変わらず視界が悪く、すべてをさらけ出してはくれない。どこにどんな化け物がいるかわからない状況では、ピクニックなんてできるはずがなかった。そもそもそんな気分でもないが。

.....

一夜のうちに大切な人を失った。

エドワード・デューイ。私の先輩の一人だ。

私はこの部隊に配属されたばかりなので、プライベートに話す機会はほんの数回しかなかったけど、本当にどこまでも面倒見がよくて、素敵な男性だった。

つい先日、私の歓迎会を口実に署の経費で落とされたチームでの飲み会で、酔っ払って私を口説きにきた彼のバカみたいにはしゃいだ表情が脳裏を過ぎる。

「……………」

昨夜、彼と再会したときには、もう手の施しようがなかった。頸動脈を傷つける大きな切り傷、左手首がちぎれ、体の至る所は食い破られていた。本当に命からがら、安全な死に場所を求めて現れたようだった。

それをただただ見守るしかなかった。

あの状態では早く安静な死を彼は望んでいただろうし、私も楽になつてほしいと願った。

そして彼は息を引き取った。

でもそれだけでは終わらなかった。
終わらせてくれなかった！

彼はあの虚ろな瞳で私に牙を剥いたのだ！
他の人たちと同じように！

……。

私はそれに銃を向けざるを得なかった。彼が私に牙を剥いたのと同じように。私は彼を撃ち殺さなければならなかった。

数十分前まで共に戦った仲間すらも……。撃たなければならなかった……。

……。

誰がこんな酷いことをする？

誰がこんな非人道的な研究をしている？

私はそいつらを見つけ出して、必ず捕まえる、いや殺してやる。

二度と人が人を喰うことがないように、人が道を外すことがないように。

だからせめてそれまで、私が銃を向けるのを許してほしい。それは私が自分と、みんなと、その人を守るためだから……。

あるいはこれはただの責任転嫁や自己完結かもしれない。

でも私にはこれしかできないから……。銃を向けているのは後ろに潜む大きな陰謀なんだ、って言い聞かせていないと私だって……。

「……………ッ！」

藪の中から突如として踊り出た何かを、咄嗟に前転して躲す。

すぐさま体勢を整えて辺りを見回す。威嚇しながら隙を伺うように低く構えている一匹のドーベルマンがいた。

体中の肉が朽ち果て、脳や目はむき出し、腹からは腸やら体液やらが垂れ流しになっている。明らかに死んでいるはずの生き物が確かに歩いていた。

これが……ゾンビ。

改めて自分が悪夢の中に舞い戻ったのだと意識させてくれる。

心臓が高鳴り、手には汗が滲む。疲れも眠気も空腹も尿意も、戦闘の邪魔になるものすべてが排除された。

意識は引き金に触れる指先と目標を捉えた視覚を尖らせ、無意識のうちに持てる感覚全部でもって周囲を警戒する。

ゾンビ化しても野性の本能は残るのか、ゾンビ犬は群れでいることが多い。そのことはすでに経験からわかっている。死角からの連携には気をつけないといけない。

先に動いたのは向こうだった。

助走無しの跳躍で一瞬のうちに懷に潜り込んだドーベルマンは、その全体重でもって私を軽く押し倒した。その衝撃でベレッタを落としてしまうが、私の喉元を喰いちぎらんとする口腔を、首を掴んで阻止する。

だらだらと垂れ流しになった唾液が顔にかかる。

あまりの悪臭に本能的に堪えられなくなって、思わずゾンビ犬の腹を蹴りあげた。肋骨が折れて、不快な感触が足に残るが、構わず横転して、ベレッタを拾う。

立ち上がったとき、向こうはすでに駆け出そうとしていた。

ぬるぬるな顔を拭うのも後に、奴が走り込んでくる位置とタイミングを先読みして、今度は蹴りを振るう。知能が低下しているらしく、そのまま突っ込んできたドーベルマンの腐った下顎に、鉄板入りのブーツが直撃。顎が粉々に砕け散り、攻撃手段を失ったゾンビ犬は呆然として地に平伏した。

私は左手にハンカチを持って汚れた顔を拭きつつ、右手のベレッタを静かに構える。

命請いをするように、あるいは正気を取り戻したように見えるゾンビ犬の瞳が映った。

「……………」

しかしこれは私の気の迷いだ。

彼らはすでに死んでいる。

このドーベルマンも、エドワードも、他の善良なる市民も。

中身を失った彼らの中に見えるものは、それは見ている私の心の投影に過ぎない。

付け込まれてはいけない。

これこそが裏で糸を引く奴らの思惑なのだ。

人の脆い部分を揺すぶって、生き残ろうと受け入れようと、後味の悪い結果しか残さない。

最低最悪の大犯罪が密かに行われていたのだ。

……。

無言のうちに引き金を引く。

露出している脳に銃弾が吸い込まれ、糸が切れたように一つの有機物が崩れ落ちた。

The Nightmare comes again. . . (後書き)

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

1 Opening

もともと私たち、ラクーン市警所属特殊作戦部隊、通称S・T・A・R・S (Special Tactics And Rescue Service) のブラヴォーチームは、アークレイ山地で人が食い殺されるという猟奇的殺人事件の調査に出動していた。しかし現場に向かう途中、乗っていたヘリコプターがエンジントラブルを起こし、緊急着陸を余儀なくされる。私を含めて六人の隊員は仕方なく、そこから別行動で調査を開始した。

私はアークレイ山地を横切るように走る黄道鉄道の線路上に不自然に停止した列車を発見。

中の調査をしていくうちに、ゾンビや擬態化したヒルの化け物に襲われ、そしてそこで助けられる形でビリー・コーエンと出会った。

私たち以外？ 無人？ のはずの列車が突然動き出し、ある施設に辿り着いた。捜査する途中で、同じ施設に独自に潜入していたエンリコ・マリーニ隊長と話す機会があって、そのときに隊員が森の中で発見した古びた洋館に集まるように指示された。隊長は一緒に来るように言ったが、わけあって施設に残らなければならなかった私は、ビリーと共に施設の破壊と脱出を試み、辛くも両者とも成功する。

予想以上に巨大な事件に巻き込まれ、当初予定されていた捜査終了時間はとくに過ぎている。

ヘリが墜落して、本部と通信もできていないだろうから、もしかしたら昨日の時点では待機命令が下っていたS・T・A・R・Sのもう一つの部隊、アルファチームがそろそろ救助に出動しているかも

しれない。

アルファチームのメンバーには会ったことがないけど、話を聞いた限りでは、ベテラン揃いでチーム内の練度は高く、さらに各方面で秀でたエースを集めたとのことだから、ブラヴォーチーム以上にこの状況に適していると言えなくもない。

要するに、私みたいな新人にしてアマチュアな隊員はいないということだ。

……。

とにかく、アークレイ山地の深い森を脱出するためには、彼らが乗ってきたヘリに便乗するしか手立てはない。彼らがちょうど洋館にいる私たちを発見してくれることを祈りつつ、仲間と合流して少しでも多くの資料を集めることが今の私にできることだろう。



洋館に辿り着いた頃には、夕暮れになっていた。あの丘から見た時は大した距離ではないと思ったが、警戒して迂回迂回しているうちにすっかり暗くなってしまった。日没前に到着できたのは不幸中の幸いだが……。

曇った窓から煌々と灯りがもれているのを見ると、すでに誰か到着しているのだろう。

洋館の外見は予想に反して小綺麗なものだった。所々壁の木材がくすんでいたり、窓ガラスが割れていたり、地面から蔦がその手をのばしていたり、と最近になって人の手が加えられなくなった証拠を表しているが、まだまだ建てられた当初の立派な風格は忘れていないといった感じだ。

しかしそれでも、中から溢れ出る死臭というか、化け物がいることを確信させるただならぬ雰囲気は、まるで隠せていなかった。建物の荘厳さと中に潜む人ならぬ人の気配が不思議なことにうまく折り合いをつけて、結果的に妙に納得してしまう雰囲気を醸している。

正面玄関の扉のすぐ脇の壁に背をあずけて、いつでも突入できる体勢だ。

右手に握るベレッタのマガジンには十五発きっかりフル装填。予備弾薬だってまだまだあるから当面の間は問題ないだろう。

ビリーからもらったマグナムリボルバーは腰のホルスターにしまっている。予備弾薬はなく、五発の最大装弾数の内、一発はすでにヒルの化け物に使っているから、残り四発。強力な火器だけに下手な場面でおいそれと使いたくない。つというわけで、たぶん出し惜しみされる。

……。

実は、銃器はこの二つしかなかったりする。

人間に対してならばまだしも、化け物に単独で挑むには圧倒的に火力に劣り、制圧力なんてまるで無に等しい装備だ。

先の施設を脱出する際に散弾銃を壊してしまったのが、つくづく悔やまれる。

だいたい、こんな事態になると予測していなかったとはいえ、そもそも新人だからって救護担当に回して、碌なものの装備させてくれなかった隊長たちが悪いんだ。メディック【衛生兵】だなんて馬鹿にして！

……。

不本意ではあるが、しかし、救護担当なので人よりも多少持ち合わせている薬品は多い。救われることもあるけど、やっぱり銃のが欲しかった。その気になればハーブを調査することだってできるし、何故か先の施設には化け物の数と同じくらいの医薬品とハーブがあったので、ストックがたくさんできた。

私の装備はだいたいそんなものだ。あとはナイフくらいで、役に立つものはない。

……。

「オーケー。行こうか」

言葉と共に息を吐く。そして大きく吸い込む。

手持ちの確認は済んだ。

手元のベレッタを見つめる。安全装置は問題なく外されている。

「……この先に何があっても驚かない。焦らない。慌てない」
胸に左手をあてる。

覚悟は決まった。

ドアノブに左手をかける。

力を込めて、ゆっくりと回す。

あとは勢いよく開け放ち、すばやく飛び込————ッ！

「——え？」

1 Opening(後書き)

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d s e a r c h f o u t h e

／仲間と共に生き残れ

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u t h e

扉を開くほんの一瞬前に、甲高い銃声が聞こえた。近くではない、でも明らかに外で響いたものだ。ベレッタを握る手に力が入る。

玄関から少し離れて辺りを見回してみた。異変はすぐに見て取れた。

「何、あれ……」

洋館の直上をカラスが群れを為して旋回している。数はそれほど多くないが、どこか様子がおかしい。羽をばらまきながら激しく翼を振り乱し、辺り構わず吠え散らして、興奮している。

「何か屋根の上にあるの……？ ……あつ」

旋回していたカラスが、突如、一斉に急降下——同時に銃声が連続して鳴り響いた！

「誰かいるんだ！ 行こう！」

背中に背負っていたフックショット——先端に鉤状の針が付いているワイヤーを射出できる大型銃で、昇りたい場所に引っ掛けると、あるいは撃ち込むと、ボタン一つで巻き上げてくれる——を構える。黄道列車の中に備え付けられていたものだが、役に立つので持ってきていたのだ。

バッテリーの残りも気になるが構ってはいられない。

強い反動を残してワイヤーは発射した。排水パイプに上手く絡み付いたのを確認してから、ワイヤーを巻き取る。すう、と体の中に空気が走り回るような、気持ちいいとも悪いとも言い難い感じがして、屋根に到達、ぶら下がった状態から体を振り子のように揺らし、屋根の上に飛びのった。

「……屋根の上じゃない？」

斜面の至る所に黒い羽は落ちているだけで、屋根の上には誰もいなかった。しかし相変わらずアサルトライフルの連射音が聞こえる。東側からだ。フックショットの留め具を取り外してから、そちらへ向かって斜面を駆け登る。

洋館はだいたい長方形に建築されているようだ。三角屋根のてっぺんに立っても、全体を見渡すことはできないくらいに大きい。

他にも森の中に何か小屋みたいなものも隠れているが、今は注意して見ている場合でもない。

東側の短い辺の端あたりで例のカラスたちがひとしきり騒いでいる。屋根の下に潜り込んだかと思うと、すぐにふたたび空中に姿を現して、戦闘機のように旋回してアサルトライフルの銃弾を躲す。たぶん二階のテラスかどこかで、激しい戦闘が繰り広げられているのだろう。

私からはまだ支援のしようがなかった。この距離からベレッタでは動き回るカラスを捉えることはできないだろうし、ましてあの小さ

能的に走りながら当てることなんて私には到底無理な話だ。

ようやく端が見えてきたときに、銃声の連続が途絶えた。きつと弾切れかジャム（※弾が詰まること）かだ。弾幕が途切れてしまった。

あ、やばい、と思った瞬間には、逃げ惑っていたカラスたちが一斉に急降下していた。カラスの鳴き声だけで、その後まったく銃声が聞こえてこないあたり、完全にやばい。

走りながら抱えるようにしていたフックショットを持ち替えて構える。だいたいの距離を測って、再度排水パイプに絡ませた。当然、すぐに巻き取るなんてことはしない。そのままワイヤーを辿るようにして走り続ける。

屋根の縁は目前だ。

人生で一度だけバンジージャンプに挑戦したことがある。小さい頃、オーストラリアかどこかだったと思う。断崖絶壁から飛び降りる荒っぽいバンジード。ゴムが伸びきると海の飛沫を感じられるほどの、それはもう死ぬほど怖いものだった。

あれを経験して以来、二度とバンジーに金を払うまいと心に決めていたが、生憎職業柄、似たような訓練を山ほどさせられた。その度に目に涙を溜めて、みんなに馬鹿にされてきたが、結局恐怖が消えることはなかった。

だから今、物凄く怖い。正直涙も出てる。

でも、仲間の命には代えられない――！

「きゃああああああつ！」

全力疾走のまま踏み切る。

遠くの山がブレて浮き上がる。

みっともない声をあげてしまったが、誤射される可能性を排除できたと考えれば、恥ずかしいこともない。……なんともないんだ、本当に。

少し飛び出たところで、ワイヤーの遊びがなくなった。

ぴんと張られた瞬間、ベクトルは反対に、加えて急速に落下を始め、弧を描いて洋館に引き付けられる。

やはりテラスで戦闘が行われていた。誰かはわからないが、素手で必死に抵抗するブラヴォーチームの隊員と数羽のカラスがもみくちゃになって、今にもその鋭いくちばしや爪で傷つけられそうになっている。

すかさず、ちょうどへその前に、ベルトで挟んでいたベレッタを取り出す。が、ついフックショットにしがみつくことに夢中になりすぎて、利き手ではない左手でやってしまった。

構えたはいいが、照準が定まらない。下手に撃っては仲間に当たってしま———！

「うわっ！」

バランスが崩れた。というか鉤爪の引っ掛かりが甘かったために、ワイヤーが外れたのだらう。なすすべもなくテラスの中央方向に放り出される。隊員の姿も見失って、もうだめかと思ったがががが

っ！

……。

「あたたた……」

こうとうぶ……きよ、強打した……。

……。

バランスを崩したおかげで、どうやら放り出される方向がちょうど隊員の位置と重なったらしい。彼の背中と私のお尻がぶつかって、二匹のカラスを押し潰したらしい。（……くちばしがちよつと痛かった）。私はそのまま頭から崩れ落ちて、左手にあったベレッタと彼は壁に激突していた。

あまりに唐突な、あまりに壮絶な私の登場に、さすがのカラスも面食らったようだ。意識を失いかけた私の頭上をただ呆然として羽ばたいていたカラスたちは、次の瞬間には次々と落とされた。

ノビている私のお腹の上を、痙攣したカラスが覆い尽くす。さすがに気味が悪くなって、まだふらふらするけれど立ち上がった。

「危うく目玉つつかれちまうところだったよ。いや、助かった。……しかしどんな助け方なんだ？」

……。

フォレスト・スパイヤーは命の危険にさらされた直後とは思えないほど冷静に、そして微笑みながら空になった弾倉を外して、私のベ

レッタを返しに近づいてきた。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

フォレスト・スパイヤーはブラヴオーチームの中で、一番射撃が上手い。その腕はS・T・A・R・Sの、というかクリーン市警のエース・オブ・エース、アルファチーム所属クリス・レッドフィールド隊員とタメを張れる程のものだという。あの数瞬のうちに十数匹のカラスを打ち落とした技術は、その噂を十分に証明しているだろう。加えてすらっとした体躯のわりに、重火器を自在に操っての後方支援にも定評があるらしい。一種のオールラウンダーに近いのかもしれない。

性格も非常に温厚かつ冷静で、仲間からの信頼も厚いようだ。

S・T・A・R・Sの二十代のメンバーの中では一番の古参らしく、次世代のリーダーを担うことになる優秀な逸材だと、飲み会の席でエンリコ隊長が零していた。

今回の任務での役割も後方支援担当で、かなり重装備だ。特にベルトや防弾ジャケットに携帯された無数の手榴弾が本当に恐ろしい。銃で撃たれたらその瞬間に爆散するにちがいない。ある意味、命知らずなタフガイでもある。

……。

「先輩ほどの名手がカラスにつつかれて死んだなんて知れたら、末代までの恥ですよ。奥さんや子供にどう言い訳するつもりですか」「いやあ、拳銃の弾切らしちまってよ。取り回しの悪い武器しか持

ってなかったんだ」

アサルトライフルとグレネードランチャーを示して、おどけた感じで言うが、顔はまじめだ。プロ意識の高い彼なら私が説教するまでもなく、内心猛烈に反省しているのだろう。しかしチームのエースに簡単に死んでもらっては困るので、もう一度だけ釘を刺しておく。

「本当、気をつけてくださいよ。頼りにしてるんですからね。……ベレッタの弾少し分けてあげますから、死なないでください」

たしかに彼が持つその二つの組み合わせは共に銃身が長いので、すばやく飛び回って接近してくるカラスに対しては少し分が悪かったかもしれない。特にグレネードランチャーなんかは弾速も遅いから、振り回して鈍器として使う以外はただの重りでしかなかったろう。

ポーチから取り出した弾薬を、彼は肩を疎めてから受け取った。

ハンドガンは全員、基本的にS・T・A・R・S仕様のものを使っている。弾を共有できる。許容できる範囲で目一杯渡してやった。

「おいおい、こんなにくれて、おまえは大丈夫なのか？」

「はい。さっきたくさん拾ったので」

「そうか、じゃ遠慮なく」

渡した弾薬を次々ジャケットのポケットに入れた。不意に私の目を見つめて、真剣な面持ちで口を開いた。

「……おかしいよな」

「え？」

「いや、これは俺の勝手な推測だが……これはただの事件じゃない。

S・T・A・R・Sは利用されてるんだ」

「……どういふことですか？」

「いいか。おまえがどこかで弾薬を見つけたように、俺もこの洋館の中でいくつか見つけたんだ。……その中にはグレネードランチャーの硫酸弾もあった。しかもご丁寧に俺のこいつと同じ種類のな。考えられるか？ 何の目的に建てられたかわからないが、普通のマシンシヨンに、いくらなんでも硫酸弾を用意することなんてないだろう？ ……他の弾薬だってそうだ。ハンドガン、アサルトライフル、ショットガン、マグナム、どいつもこいつもS・T・A・R・Sで採用されてる口径とびったり同じなんだ。……ここまでくると、誰かが意図的に配置したと考えるのが当たり前だろう？」

「それはそうですけど……」

たしかに先の施設にも多くの武器弾薬、医薬品があった。もともと生きていた人が使っていたというには不自然なくらいそこら中に落ちていたし、親切にもすべての弾丸の種類が銃に合っていた。

「それとゾンビやゾンビ犬みたいな元の生物がそのまま狂ったようなのは違って、明らかに手の加えられた、つまり原形がわからないほど姿が変わったクリーチャーがいただろ？」

「ええ、いましたね。そういうのは概して強敵でした」

「そうだな。そして俺が注目したのは、それらは決して被って"は出てこない"ということだ」

「かぶって？ 複数が同時にって意味ですか？」

「そうだ。同じ奴が二匹同時になんてことはあったが、決して違う種類のクリーチャーが一斉に襲い掛かってくることはなかっただろう？ しかも強敵と出会う前には、必ず強力な武器が手に入る。……おそらく事件の首謀者は、俺たちにクリーチャーと互角に戦ってもらいたいんだろうな」

……。

「S・T・A・R・Sを利用して、クリーチャーの実践データでも採っているんだろう。俺たちはプロの集団だからな。戦闘能力はそれなりのもんだ。それに片田舎のちっぽけな町警察所属だから、軍部にやらせるより都合がいい。……上手く罠に嵌められちまったってわけだ。もしかしたらその辺に監視カメラがあって、今も俺たちを見張っているのかもしれないな」

フォレストは両腕を開いて、天を仰ぎみる。神様を恨んでいるのか、それとも自分の不運を呪っているのか、いずれにせよ諦めに似たポーズだ。

彼の推測はいくらか突飛過ぎる気もする。しかし昨夜を振り返ってみても、否定する要素どころか、むしろ彼の言うとおり、肯定せざるを得ない証拠と為り得るものがいくつも浮かび上がってくるのは事実だ。

「……先輩。それでも、私たちはS・T・A・R・Sです。向かう先が明らかに罠だとしても、利用されているにしても、やるべきことは決まっています。襲い掛かる化け物を駆逐し、首謀者へつながる証拠を集めて、ここから脱出して世間に公表するんです！ S・T・A・R・Sを舐めたら、ただじゃ済まないことを見せてやりましょう！」

本当に利用されているとしたら、それはむしろ好都合。捜すまでもなく犯罪組織がこちらに歩み寄ってきているのだ。

すでに垂れ下げられた釣り針に無理矢理くくりつけられてしまったのなら、釣人を池の中に、こちらのテリトリーに引きずり込んでやるだけだ。

「新人のくせに威勢がいいな。でも言ってることはまさにそのとおりだ。俺たちはこういう事態のときのためにいるんだったな」

言いながら近寄ってきたかと思うと、腕を私の首に回してそのまま抱き寄せた。あわわつとしているうちに、彼は私の頭に鼻先を置いて匂いを嗅いでいるようだ。

「……………」

セクハラでは、と言おうとも思ったが、人間味が恋しくなっていたのは私も同じだ。

彼の腕の温もりや汗の匂いを感じていると思わず涙が出そうになった。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u t h e

鍵の概念は曖昧です

そこはリメイク版ではなくWii版のイメージでお願いします。

「……そうか。エドワードは死んだか」

辺りはいよいよ闇が深まって、どこからか立ち込めてきた暗雲が、不気味な満月を今にも隠そうとしていた。ヘリが飛べないほどの嵐にならないようにと祈りつつ、いつまでもテラスで立ち話しているのも危険なので、とりあえず安全が確保されているというエントランスホールへ移動を始めた。慎重に進む彼の後ろを、背後を警戒しながらついていく。一応テラスに来る際に、クリアしているらしいのだが、念には念をおく。

ホールに続く廊下に、黒焦げになったゾンビが数体ほど倒れていた。フォレストがグレネードランチャーの焼夷弾でもって倒したのだという。彼が言うには、ゾンビに対して焼夷弾は非常に有効らしく、ほぼ一撃で仕留められるとのことだ。しかし床や壁に引火しないのだろうか。

……。

狭い廊下で会敵すると、それが例え移動の遅いゾンビであっても避けることは非常に困難だ。

だから一体々倒してクリアしてから進むか、引き返して別のルートを探すしかない。

「ケビンのやろうはどうしてるかなあ。上手く生き残っていればいいが……」

ケビンという人物（実はよく知らない）は、S・T・A・R・S隊員ではなく一般署員だ。ヘリで私たちを送り届けた後は、一度署に戻って任務終了時間に迎えに来てくれる予定だったが、エンジントラブルで緊急着陸したために、森の中でヘリの修理しながら待機することになってしまった。こんな危険な状況になっているとは知らず、護衛も残さずにここまで来てしまったが、彼は無事だろうか……？

ゴグル越しの優しい目つき、親指を立て、初任務に臨む私を励まして送り出してくれた彼の姿が、今でも私を支えてくれている。

きっと彼も生きている。なんとなくそんな気がする。そうであってほしい。

今はそれを信じて進むしかない。

……。

「そういやビリー・コーエン死刑囚はどうなった？」

「私が黄道列車の中で発見しました。……抵抗したのでやむを得ず射殺しました」

「そうか。……大変だったな」

大方の報告や情報が出尽くしたとき、ちょうどタイミング良くエントランスホールに出た。

狭苦しい廊下と扉一枚隔てたところに、広大な空間が現れ、一瞬目が眩んだ。至る所に凝った装飾がなされ、高価な調度品がさりげなく置いてある。特に嫌でも目に入る、ホール中心に天井からぶら下がるきらびやかで巨大なシャンデリアと、私からは右手に見える、玄関扉から入って真正面の階段を上がったところの壁全面を使った

抽象画は、来る者に金と権力を示すには十分過ぎる威圧感を放っている。

「ここには何もいないようですね」

「ああ、最初からな」

端から端まで続く渡り廊下を真ん中まで行って、階段を降りる。抽象画の壁に突き当たる踊り場で立ち止まって見上げてみる。何の絵かわからないけど、やはり圧倒されてしまうものがって……あれ？

「先輩、これって扉ですか？」

絵の中から飛び出るように扉の取っ手らしきものがあつた。よく見ると若干隙間も空いていた。

「本当だ」

「知らなかったんですか？」

「ああ。リチャードと調べたときには気付かなかったな」

しっかりしてくださいよ、と言いつつ突入してみるかアイコンタクトで問う。彼が頷くのを見て、ベレッタを構えて扉の取っ手を掴んだ。無言のうちに配置につく。私が扉を開けて、彼が先に飛び込んで、その後を追う、というのは今さら確認するまでもない当然の役割分担だろう、たぶん。

ハンドサインでタイミングを合わせ、勢いよく開け放つ。転がり込むように突入した彼を、背後を確認し少しだけ間を空けてから、追う。

敵はいなかった。薄暗い廊下が続き、階段があつたので降りる。そ

の先で突き当たった扉を、フォレストが一人で、ドアノブを捻って蹴り破った。

続いて中に入っ——爆発音ッ！

「うあっ!!」

——同時に視界が真っ白になる！

咄嗟にしゃがみ込んで目を抑えたが、すでに遅かった。うっかりグレネードランチャーのマズルフラッシュの激しい閃光に目をやられてしまったらしい。

何も見えない中、二度目の爆発音を聞いた。ゾンビがもう一体いたのだろう。その後、耳鳴りだけが残る。

フォレスト（と思われる人）が私の腕を掴んで、やや乱暴に引き起こした。目をぱちぱちさせたり、擦ったりしながら臃げな人影に向き直った。

「大丈夫か？」

「あい……大丈夫……」

……ではないです。

「……おまえなあ、銃口の前に飛び出すなよ。きれいな顔をわざわざさぐちゃぐちゃにしたいのか？」

……。

「だって訓練ではこういうときは左右に展開するようになって。先輩が左に出たから……」

「その右側にゾンビがいたんだよ！ 前に出た奴の射線に入らないようにするのは基本だろう！ しっかりしてくれよ、本当に」

ああ、ようやく見えるようになってきた。心配しているのか、怒っているのかよくわからない表情のフォレストが映る。

近くに一体、鉄柵の向こう、階段を折り返したところに一体、焼死体が転がっていた。

「オーケー、すみませんでした。進みましょう」

……。

ここはどんな場所だ？

コンクリートと鉄柵で舗装された道が続き、外側には木々が生い茂っている。中庭だろうか。

少し進んで低い段差を降りたところである存在に気がついた。

「墓石……ですよね」

「……だな」

鉄柵の向こうに墓石が並んでいた。ぼろぼろに崩れているものもあれば、真新しいものもある。誰かが死んで、誰かが埋めたのだろう。

「スリラーみたいなのは勘弁だぜ」

「笑えませんか」

冗談が冗談にならないのが現在の状況なのだが……。とりあえず墓地に異変はないけれど、注意して進む。

道なりに進んでいくと不意に幅が狭くなって、石の壁に行く手を遮られた。石の壁には弓矢の絵が掘られていて、矢じりの部分が不自然に深くなっている。何か意味があるのだろうか。

「どういふことですかね？ 例の謎解きでしょうか」

「さあな、さっぱりだぜ。……いや、待てよ。弓矢と言えばさっきどこかで見たな……。ああ！」

突然、フォレストは鞭で打たれたように来た道を引き返した。

「ちょっ！ 先輩！」

「おまえはホールに戻ってろ！ 忘れ物を取ってくるっ！」

……なんなんだいったい。

まああの様子なら謎が解けたんだろうけど。この件は彼に任せておけばいいか。

言われたとおり、足早に墓地をあとにする。階段を昇って、ホールにつながる扉を静かに開ける。

……異常なし、と。

この場所だけは何か神聖なものに守られているかのようで、なぜか安心できる。

扉の脇に背をもたせて、腰を下ろした。三角座りで膝の上に顎をの

せて、一息つく。

……。

フォレスト先輩と合流して、少し気が楽になった。しかし信頼でき
て頼りになる仲間といると、どこか必要以上に気が抜けてしまう。
さっきから私は先輩の足を引っ張り過ぎだ。

これじゃ、あの施設を一人で破壊して脱出したっていう報告はちょ
っと無理があるかなあ。事実、ビリーがいなければ施設に辿り着け
てすらいなかっただろうし。でも間違ってもビリーと協力したなん
て言えないよなあ。……どうしよう。

「ビリーのやつ……、どうしてるだろ」

半日歩いたくらいでは、アークレイの深い森は抜けられないだろう。
化け物がうごめく暗闇の中で、彼は生き残っているだろうか。

「まあでも彼が死ぬなんてのは考えられな……ん？」

——犬の声が近づいてくる。
なんだ——何が起こった？

腰を屈めて、階段の手摺りに隠れる。
ちょうどその時、外で銃声が鳴った。

「……ス！ こっ………！」

「ち………う！」

「あの………で………れ！」

叫び声が聞こえる。

また何回か銃声が響いてから、扉が荒っぽく開いた。

身構える。

数人が転がり込んで、最後に入ってきた金髪の男が扉を閉めようとするが、数匹のゾンビ犬が鼻先を隙間に挿込んでいた。

男は拳銃をその切っ先に突き付けると、無表情のままに次々と撃ち吹き飛ばしてから、静かに扉を閉めた。

「ここは……」

「普通の館じゃなさそうだな」

「みんな大丈夫？」

「なんとかな」

……。

これが……アルファチーム。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

赤茶色の防弾チョッキを着た中年の隊員が無線機に盛んに呼び掛けている。応答しろ、とか、命令違反だぞ、とか、今すぐ引き返せ、とか、だいたいネガティブな内容だ。どうやらヘリの操縦士に連絡しているようだが、向こうからの返答はない。しばらく通信を続けてようやく諦めたかと思うと、今度はいらいらした様子でマグナムリボルバーの弾を詰め替え始めた。

「ブラッドはどうしたっていうの？　それにさっきの犬……。ジョゼフが……」

「悲しむのは後だぜ、ジル。こうなった以上、今できることをしないと俺たちまでやられちまう」

混乱している様子の女性隊員を励ましている男性隊員だが、自分自身あまり言葉通りにしているようには見えない。かなり暗い顔で、がっちりとした肩は明らかに萎縮している。

そんな中、ただ一人だけ冷静に腕組みをしている金髪の男。この変に落ち着き払った立ち振舞いといい、ゾンビ犬を見ても眉一つ動かさず撃ち殺したことといい、薄白い肌に妙にサングラスが似合っていることといい、なんだろう、ただならぬ風格を纏っている。

たぶん、あれがアルファチームの隊長だろう。……しかしあれは場数を踏んでるとかその程度で言い表せる雰囲気なんだろうか。

……。

状況から見て、アルファチームの到着は私たちが予想していたほどの事態の好転には繋がらなかったようだ。彼らもまた、私たち同様の狂気に満ちた悪夢に引きずりこまれてしまったらしい。

ヘリとも連絡は取れないし、装備を見てみてもお世辞にもまともな装備とは言えない。赤茶色の中年がマグナムリボルバーを持っているのは、ハンドガンしか持っていないように見える。（青年の男性隊員に至っては手ぶらに見えるんですけど……なんで？）。私たちが行方不明になったことを考えれば、もう少し重装備で助けに来て欲しかった。……本部と音信不通になってしまったことが、ここまで尾をひくことになろうとは。

いや、今さら悔やんでもしょうがないか。

さっさと合流して状況を説明したいところなんだけど、生憎初対面フオレストのときみたいになで、しかも向こうはピリピリしてるから、下手な登場の仕方したら間違はなく蜂の巣にされてしまうだろう。下手に隠れてしまったため、完全に出るタイミングを逸していた。

どうしたものかー。

……。

うーん。

……普通でいいかな。

ベレッタをベルトに挟む。ゆっくりと立ち上がって、手すりに手をかけ、階段を降り始める。

「アルファチームのみなさん。はじめまして。わた——」
「フリーズっ!!」

全員が一斉に得物をこちらに向ける。一人だけナイフを構えてるのがいるけど。

……。

いや、こうなるってわかってたよ。

「何者だ!」

「ブラヴォーチームの者です」

両手を上げてやるせなく言った。

アルファチームメンバーは揃って疑いの念がこもった視線を向ける。こんなやつ知らねえよ、とか、嘘だろこの悪党、とか、小娘のくせしやがって、とか、ジョゼフの仇よ、とか、敵意むき出しのテレパシーが辺りに飛び交っていた。

……ねえ、隊が違うとはいえ、新入りが入るんだから履歴書くらい見といてよ。写真だってあるんだから。

「先日付けでブラヴォーチームに配属されました、レベッカ・チェンバースであります」

……。

「……………ああ、例の新入りか」

ようやく金髪の隊長さんだけ気づいてくれた。他の隊員は未だに疑っている模様。

こんな調子で大丈夫なんだろうか。両チームの相互支援的に。実はあんまり連携とれていないのではないか。

……ため息。



昨日から続く私たちを取り巻く状況を、簡単にかつ多少改竄して報告する。話している間に、天気が荒れてきたようで、次第に雷が闇夜を断続的に切り裂いて怒号を響かせるようになった。ある意味、こんな日にぴったりの空模様になったと言える。

……。

「なるほど。だいたい状況は飲み込めた」

金髪サングラスの隊長風の男改めアルバート・ウェスカ―隊長は終始腕組みをしたまま、驚いたり、憤慨したり、泣き出したりする隊員たちを静かに制しつつ、報告が終わると一言だけ口にして、額を押さえて黙ってしまった。散っていった仲間に祈りを捧げているのか、あるいは今後のことを考えているのか、その表情からはわから

ない。

「本当に、あなたが一人でその、化け物みたいな人喰いヒルや二メートルを超える巨人を相手に生き残って、さらに施設まで破壊したって言うの？」

今度は、一見して一番か弱いかと思ったが、実は隊長の次に話を冷静に聞いていた女性隊員、ジル・バレンタインが質問した。

「ええっと、まあそういうことになります」

「信じられない！」

たしかに私自身話していても信じられるような内容じゃなかったけど、でも半分は本当になるのかなあ。実際は二人だったわけだから。……そういう問題じゃないか。

「信じないものにも、ここに彼女が生きて俺たちに事件の惨状を報告してくれているのが、なによりの証拠だろう」

丸顔に携えた髭がなんとも渋い、中年隊員バリー・バートンがどぎまぎする私をフォローしてくれた。目元はエドワードのために流した涙のせいで腫れあがって、充血している。

「配属されてこれが初任務かよ。しかも戦闘が専門じゃないのに凄いな。大したもんだ」

短髪長身、がっちりとした体型、明らかな体育会系な男性隊員。例のエース・オブ・エース、クリス・レッドフィールドが私の頭を撫でた。

このエース、意外と間抜けでゾンビ犬に追われている間に、拳銃を落としてしまったらしい。それで丸腰なんだそうだ。

……。

「クリス先輩、私のマグナムリボルバー貸してあげます。いつまでもナイフだけってわけにもいかないでしょう？」

「でも、きみは……」

「こっちはなんとかします。気にしないでください」

「そうか？ 悪いな」

……なんでこう先輩の心配ばかりして、自分の装備を心細くさせてるんだろ。

「おーい、弾は？ まさかこれだけってことはないよな？」

「え？ あ、えーっと、弾はそれだけに……」

やばい。忘れてた。

「弾なら俺が持ってるよ」

バリーがこちらに歩み寄りながら言った。そういえば、彼もマグナムリボルバーを持っていたな。

「バリー、この口径の弾持ってるの？」

「クリス。俺を誰だと思ってんだ？ このタイプだと口径は……」

ポケットから弾薬を取り出してクリスに渡す。どうやらなんとかあったようだ。

……。

「それにしても先輩たちの装備、さすがにお粗末過ぎませんか？
いくら予想外とはいえ、私たちが行方不明になってるんですよ。も
う少し何かあると思うんですけど……」

言うまい言うまい、と我慢してたけどやっぱりダメだった。どう考
えてもおかしいもの、これは。特殊部隊を助けにくる装備ではない。

「いや、持ってきてはいたんだけど……その、ヘリに置きっぱなし
で」

「どうして置いてきちゃうんですか……」

行方不明の特殊部隊、暗くて深い森、怪しげな洋館。
これだけの不安要素があって、なぜ……！

クリスはバツが悪そうにしているだけだったが、その答えをジルが
耳打ちしてくれた。

「隊長の命令だったのよ……」

……命令？

持ってきた武器を置いていけなんて命令があるのか？

隊長に詰め寄ろうかどうか考えていると、ちょうどどこかからグレ
ネードランチャーの発射が聞こえた。

「なんだ？」

その隊長が訊く。

「あ、フォレスト先輩ですね。たぶん大丈夫だと思いますよ」
「こんな状況でそんなことを言えるなんてな。伊達に一日過ごしてないか」

あれ、やんわり怒られた。

たしかに状況を考えれば、私が横着しているな。

「……わかりました。私が確認に行きます」
「私も一緒に」

ジルが挙手。

ここは女同士でってところだろうか。

「了解。我々はここを確保しておく」

サングラスをくいとあげるウェスカー隊長。

……。

男性陣と別れを告げて、私とジルで銃声の調査へ向かった。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d s e a r c h f o u t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

玄関から見て左手のドアは食堂に通じていた。広々とした空間の真ん中に長テーブルがあり、上座の背後には煌々と灯る暖炉がある。二階は吹き抜けになっていて、囲うように通る通路から二体ほどゾンビが覗き込んでいた。手すりが高いために、落ちてくることはなさそうだから、とりあえずのところ無視しておこう。

大きな柱時計の振り子が鳴らす不気味な音が響いている。

「準備はいい？」

「もちろんです」

食堂には入ってきた扉のほかには一つしかなかった。私の聴覚と勘が正しければ、この向こうから銃声は聞こえてきたはずだ。

ジルは、突入体勢の私の背後で一步退いたところに構えていた。一度目で合図したときに、口元を歪めて不敵に微笑んでみせたあたり、お手並み拝見って感じなんだろう。何を期待しているのやら。

「……………すう」

とても新鮮とは言えない空気を取り入れ、改めて吐き出す。

何回やってもこの瞬間だけは落ち着かないなあ。

——ん？

「…………スト！ ……だ！」

向こうから声がっ！

まずい！ 咄嗟に扉を蹴破って飛び込む——！！

「あ！ おまつ、バカやろう！」

——左にフォレストがつてええええ右肩に物凄い力があああ！！

「くぁッ！ な、なんっ！？」

ゾンビ！

しまっ——喰われる！

——！！

「これが……ゾンビ、ね」

轟音と共に激痛が急速に遠退いていった。

私を抱きよせて今にも喰らわんとしていたゾンビだが、ジルに脳髓を吹き飛ばされたため、力なく私の胸にもたれかかってきた。

さすがに気持ち悪いので突き放すと、そのまま背後に倒れ、衝撃で腐っていた首がもげた。ごろごろと転がって廊下の壁で止まった。

……。

「助かった……。ジルさん、ありがとうございました」
「危うく死んじゃうとこだったね」

きんきんする耳にうつすらと聞こえてくる。

ジルは優しく微笑んでくれるが、その笑みにはやはりどこか翳りがあつた。

「まったくだ。射線に入るんじゃないって言ってるだろ」

半ば呆れた様子のフォレストの隣りに、同隊のケネス・サリバンがいた。

目が合う。一言挨拶すると、彼は軽く手をあげて応えた。

無愛想な返事だが、これが彼の流儀らしい。

S・T・A・R・S内唯一の黒人隊員にして、最年長の彼は、やはり私たち若手の隊員とはもちろん、ベテラン連や隊長らともどこか違う、落ちついた、悟りきったような物腰がある。あまり喋ったことはないが、彼が無口なだけであって、別に嫌われているわけではない……。はず。

ポジションはポイントマンで、危険な現場に先頭に立って対処し、偵察、制圧といったアクティブな任務の要となる役どころを担っている。そのため装備は火力があり、かつ敏捷性を損なわないように、薄い防弾ジャケットとお手製の軽量化アサルトライフルのみとノーマルと言えそうなのだが、長年の現場生活から見出した自信のようなものが溢れている。

しかしさすがに歳のためか、在りし日のキレがなくなって衰えを感じている、そろそろ潮時だろうか、とエンリコ隊長に洩らしていた

らしい。

私からすれば、まだまだ現役ですよお、としか言えないくらいなんだけど、……そりゃそうか。

ちなみに趣味は園芸と犬の調教。

一見かわいらしく思えるけど、その実は化学兵器の研究とかなんとか。本当かよ。

……。

「よおジル。お前がレベッカというってことはアルファチームが到着したってことだよな」

フォレストがこちらに寄ってくる。その後ろにケネスが続く。

「ええ、報告はこの娘からされてるわ。大変なことになってるのね」

「ああ、正直逃げ出したいところだ……」

廊下の向かい側、フォレストたちがいた場所に一つ、焼死体が転がっている。

「先輩方は、ここで何をしていたんですか？」

「そのティールームを物色していたところを背後からゾンビに襲われてな。フォレストに助けもらった」

おお。フォレストに向かって言ったのに、ケネスが応えた。……いや、別にいいんだけど、そんなことが今までなかっただけに、驚いた。

「はあ、そうなんですか。ケネス先輩、救われましたね」

若手に借りつくっちゃいましたね、という意味を込めてニヤニヤしていたら、お前も同じようなもんだろ、というニュアンスの苦笑がもれた。

しかしまさかこんなところでこんなやりとりをすることになろうとは。この人、こんな顔もできるんだ。

「……まあ、なんともなくてよかったわね。無事ならさっさとエントランスホールに戻りましょう」

「あたっ」

ケネスにお返しとして、いやいや、ここに来る前の取り決めでジルは私の援護担当になってたんですから、結果的に助けられることになったけどあれは仕事のうちですよ、みたいな不敵な顔をしていると、ジルに頭を叩かれて、話を進められる。……ちよつとした冗談じゃないですか。

「おう、ならこっちはこっちで調査進めるから、ジル、レベツカを頼んだぜ」

「了解、気をつけてね」

お荷物（私）の引き継ぎを済ませて、二人は焼死体の転がるティールームに歩み始めるが、一声あげて、フォレストが再び戻ってきた。

「うっかりしてた。これが例の墓地のキーアイテムじゃないか？」

彼が差し出した手には、三〇センチほどの弓矢があった。先端の矢じりは光沢のある石のようで、全体のバランスを考えると不自然に大きい。

「その階段を昇って少し行っただけ、そこだけ形がおかしいのを覚えててな。俺はもう少しこっちが気になるから、お前が墓地に行って確かめてくれ。悪いな」

じゃ、と一つ笑って焼死体を跨いで、その階段の方に消えてしまった。

「なに、その墓地って？」

「うーん、中庭っぽいところなんですけどね。説明するより行った方が早いですよ」

私とジルも来た道を引き返した。



「……誰もいないね」

「……いませんね」

エントランスホールに戻ってみると、そこにはすでに誰もいなかった。

特に異変はなく、たしかに確保されてはいたが、肝心な隊長たちの姿が忽然と消えていた。

あちこち探してみたけれど、どうやらもうこの近くにはいないようだ。

「まったく、どうして男ってこうなのかしら」

「ジルさん、男運なさそうですものね……」

「なんですって！」

いや、べつに冗談ですよ！

だから思いっきり拳銃突き付けないでっ！

「あとね。ジル、でいいわよ。歳もちょっとしか離れてないわけだし」

「……ちよつとですか？」

「なに？ それともジル御姐さんって呼びたいわけ？ どっちでもいいのよ、私わね！」

「ジル！ ジル、やめてー！ 安全装置外れてるからっ！ 撃鉄起きてるからッ！」

め、目がマジだよ！ この人っ！

「いいわ。さっさと墓地に行きましょう」

「そ、それはお前を殺して埋めちまうぞっていう比喻か何かですか？」

「早くしなさい」

案内して、と歩き出した彼女の前に慌てて出るが、背中を任せて大丈夫なんだろうか……？

……。

正面階段の踊り場の扉を通り、暗い階段を降って、中庭に出た。涼

しい風が頬を撫でる。

柵の向こうの墓石を見据えながら、階段を折り返して、例の石壁の前に来る。

壁にはたしかにフォレストがくれた弓矢と同じ形の型が彫られている。しかし矢じりの部分はぴったりなのだが、どうも節の部分がまったく合っていない。現物のが長すぎる。

「……はまりません」

「フォレストが間違えたんじゃないの？　どれどれ、ちょっと貸して」

弓矢を奪い取って、あれやこれやと色々な方向から眺めてみたり、今度は石板のそこら中を撫で回してみたりして、ついに何かに気付いたのか矢じりの部分を握って、力一杯引っ張った。二、三回試していると、節が矢じりから綺麗に抜けてしまった。

「だ、大丈夫ですか？」

壊れちゃったのでは……？

「よし、で、これをっと！」

矢じりの部分を石板にはめ込み、節の部分はそこらに投げ捨てる。

……この人は。

しばらく何も起こらなかった。

しかし次の瞬間、地を揺るがしながら目の前の石壁が持ち上がり、中から新たに階段が現れた。どうやらジルの考えは当たっていたよ

うだ。

「さあ、行こう」

先立って降っていくジルの背中を追いかけて、暗く埃っぽい階段を降りた。

S u r v i v e y o u r s e l f a n d S e a r c h f o u t h e

ご意見、ご感想、アドバイス等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2627y/>

素敵な恋は夜明けと共に！

2011年11月27日18時45分発行